令和6年 5月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第1008号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS 5

MAY.2024.#1008

Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字は、動いてる！

あなたと想いをひとつにして。

5月は『赤十字運動月間』

特集 | ▶P. 2

赤十字のココが推し！

赤十字活動の魅力を職員が紹介

CONTENTS

TOPICS

赤十字運動月間 2024年5月1日～31日
新CM＆特設サイトで
365日動き続ける赤十字を発信

日赤の“公式マスコット・キャラクター”、デビュー10周年！
『ハートラちゃん』の魅力を紹介 …… P. 4-5

連載

未来を守る防災ゼミナール …… P. 4
献血ハートフルストーリー …… P. 5

AREA NEWS

［北海道］学生による救護活動も評価
伊達赤十字看護専門学校の80年の歴史に幕
［千葉］楽しく学んで防災力向上へ
防災イベント「まなぼうさい」
［宮城］視覚に頼らず命を救う行動を
視覚支援学校で救急法講習
／他 …… P. 6

WORLD NEWS

アフガニスタン地震
複合危機の中で活躍する女性たち …… P. 8

PRESENT!!

ダイソン
空気清浄機能付タワーファン
(Dyson Pure Cool Link™)

“日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう！

プレゼント！3名様

詳しくはP.7をCheck！▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

R100 古紙パルプ配合率100％再生紙を使用

VEGETABLE OIL INK 環境にやさしい植物油インキを使用しています

SPECIAL FEATURE | 特集

5月は『赤十字運動月間*』

赤十字のココが推し！

日赤は、**「人間のいのちと健康、尊厳を守る」**ために、下記の事業を行っています。
では実際に、どんな人たちが、どんな思いで活動しているのでしょうか？
今回は、異なる部署で活躍する3人の日赤職員にインタビューし、
赤十字の活動で印象に残った出来事、「赤十字のココがすごい！」と思える
ところなど、それぞれの熱い思いを聞きました。
皆さまに、赤十字の活動を少しでも身近に考えていただく
きっかけになれば幸いです。

日本赤十字社の事業

- 災害救護（救護活動、防災教育）
- 社会活動（救急法などの講習、地域包括ケア）
- 青少年赤十字
- 国際活動
- 社会福祉
- 医療
- 看護師などの養成
- 血液（献血、輸血用血液製剤の供給）

赤十字の事業は、その人道的な使命に賛同し全国各地で活動する多くのボランティアや、会員によって支えられています。

＊『赤十字運動月間』とは
5月1日は日本赤十字社の創立記念日。そして、5月8日は赤十字の創設者アンリー・デュナン生誕の日です。日赤では毎年5月を「赤十字運動月間」として、赤十字のさまざまな活動を広くご紹介し、継続的な支援をお願いしています。

救護活動

国際活動

赤十字の歴史

Interview 日本赤十字社 石川県支部

お話を聞いた人
森岡誠人（もりおか まこと）さん

“元日の地震で被災者となり、一つの目標のために結集していく赤十字の強さ・大きさを実感”

金沢赤十字病院で26年間、看護師として働き、3年前に日赤石川県支部の職員になりました。「赤十字」の職員であることを意識するきっかけとなったのは、2011年の東日本大震災です。私は、金沢赤十字病院の救護班第一班として、発災翌日に病院を出発。移動に1日かかって車中泊もし、ようやくたどり着いた被災地には想像を絶する光景が…。出発前、病院の先輩から「自分たちはスーパーマンではないから」と声を掛けられていました。被災地で活動してみて、その言葉の意図を理解しました。「自分は役に立たなかった…」という不全感で落ち込まないように、という経験者のアドバイスだったのです。あの混乱の中、看護師としてもっとできることがあったのでは、と、今でも思い出しては自問自答します。その経験から「被災地で活動をする人たちが力を発揮できるように、活動全体を援護する業務に携わりたい」という思いを強くしました。

今年の元日に発生した能登半島地震では私自身が被災者となり、日頃から幅広く防災知識を得ておく大切さや、赤十字の対応の早さと支援の大きさを感じています。発災時は震度7を観測した石川県志賀町の実家で過ごしていました。家は倒壊を免れましたが、地域全体がひどい状況だったので私の両親や息子たちと指定の避難所へ。しかし、そこも被災し避難できる状況ではなく、すぐに周りの人々に声をかけ、避難生活で必要となる物資をリヤカーに積み、廃校となった高台の学校に向かいました。**冷静に判断し、迷わず行動できたのは赤十字防災セミナーで何度も被災のシミュレーションをしていたおかげです。**翌2日に自宅のある金沢に戻り、3日の朝に支部へ出社すると、支部内にはすでにたくさんの人が。石川県外、東京からも赤十字の仲間が駆けつけ、支援計画を立て、役割分担して活動していました。これが、赤十字の強みです。東日本大震災のときもそうでした。いつ何時起こるかわからない災害に向けて訓練を重ね、**いざ発災すると、全国の赤十字が瞬時に団結し、支援の態勢を組んでぞくぞくと被災地に向かいます。**そして重要なポイントは被災地の意向をくんで活動すること。全国から来てくれた救護班も、こころのケア班も赤十字ボランティアも、赤十字の理念の下、同じ方向を向き、被災地の声に耳を傾け、活動の主導を被災県の支部に託してサポートしてくれます。被災地の職員として、感謝しかありません。赤十字の理念を実践するとは、こういうことなんだと、実感しています。

2011年3月、東日本大震災の被災地で救護班として避難者の話を聞く森岡さん（右から2人目）

森岡さんは幼児安全法などの講習の講師も務める。イベントでも練習用の人形を用いて簡単な講習を行う

能登半島地震後、4000平方メートルが焼失した輪島朝市通りで手を合わせる森岡さん（右側）

Interview 赤十字情報プラザ

お話を聞いた人
大西智子（おおにし ともこ）さん

“戦争の加害者でもあり、被害者でもある人間。その救いとなり、よりどころにもなる、赤十字”

大学4年のとき、卒論のための資料閲覧を目的に、日赤本社の図書資料室を訪ねたのが、赤十字との出会い。幾度か足を運ぶうちに、当時の司書の方に「入社試験を受けてみたら？」と後押しされ、私の赤十字人生が始まりました。

今年で勤続30年を迎えましたが、最も多くの時間を過ごしたのが秘書課です。主に、近衛忠煇副社長（現・名誉社長）をサポートする役目でした。近衛名誉社長は、アジア人初のIFRC会長を務め、「人道の巨人」と呼ばれた方です。この5月に発売になる本*の中では、これまで語られてこなかった生い立ちや、ご家族と戦争に関することにも触れられています。近衛名誉社長の足掛け2年半に及ぶロングインタビューを補佐し、赤十字人としての軌跡を記録するお手伝いができたことは貴重な経験でした。

今、赤十字情報プラザの管理者として、日赤の数々の記録を預かる立場となり、改めて、それを発信する責務を感じています。ここにあるのは、それぞれの時代で命と向き合った活動の最先端の“証拠”で、いわば、タイムマシーンのようなもの。

私たち日本人は、過去の戦争で、加害者・被害者、両方の経験をしています。私の身内にも戦死者や、兵士として戦地に赴きトラウマになるほどの悲惨な経験をした者、空襲で家も財産も焼かれ、赤ちゃんを背負い、大切な着物の帯一つを持って命からがら逃げた者がいました。私自身、海外で現地の方から戦争加害者に向ける蔑称で呼ばれたことがあり、若い頃は加害者意識など持っていなかったので、それはかなりショックな体験でした。

私たち人間は、長い歴史の中で戦争を繰り返してきました。今日の加害者は明日の被害者かもしれない…、まさに表裏一体です。そんな人間にとって、赤十字は、よりどころ、そして、救いなのではと、私は思っています。**時代が移り変わっても「苦しんでいる人を救いたい」という普遍の思いの結実、その大きな存在の中に身を置けることの幸せ**を、感じずにはいられません。

＊近衛名誉社長の本の紹介はP.7に。

日赤本社内にある「赤十字情報プラザ」で、来館者に展示の説明を行う大西さん（右）

Interview 日本赤十字社 国際部

お話を聞いた人
三亀恭子（みき きょうこ）さん

“ストリートチルドレンに胸を痛めた少女時代 人を救う赤十字の活動に参加できる喜び”

私は、小学校高学年の3年間、父の仕事の関係でインドネシアのジャカルタで過ごしました。当時のジャカルタは貧富の差が激しく、自分と同じ年頃の子どもが道端で物を売ったり、物乞いをしたりする姿がありました。そのようにストリートチルドレンがいる光景に衝撃を受け、世界の貧困格差をなくすにはどうしたらいいかと考えるようになりました。帰国後、父が教員として青少年赤十字の活動に携わったことで赤十字の存在を知り、「国際的な社会貢献活動ができるかもしれない」と思ったのが、日赤に入社した理由です。

全国に7つある赤十字看護大学の一つ、日本赤十字九州国際看護大学での6年間の勤務を経て、4年前から日赤本社国際部に配属。看護大時代には、同じ九州で発生した熊本地震の被災地に学生たちと赴き、ボランティア活動を実施。赤十字の看護大の学生は、災害支援への関心が高く、熱心な生徒が多いことに感銘を受けました。国際部に配属されてから、改めて、世界191社ある赤十字・赤新月社の活動範囲の広さを感じています。**世界のどこで災害が起きても、その土地の被災者に寄り添った活動ができるのは、そこに赤十字の仲間がいるから。**この4月からは、マレーシアのクアラルンプールにあるIFRC*アジア太平洋地域事務所に出向し、アジア大洋州で「ユース」と言われる若い世代と、赤十字の「人道」を広めるために活動しています。赤十字は人を救うための“運動体”。力を合わせて活動する赤十字の魅力をかみしめる日々です。

＊IFRC＝国際赤十字・赤新月社連盟

「NHK海外たすけあい」CMに出演した三亀さん

海外の赤十字ユースの研修に参加（後列右から5人目）

TOPICS

1 TOPICS

赤十字運動月間 2024年5月1日～31日

新CM&特設サイトで365日動き続ける赤十字を発信

日赤は毎年5月を**「赤十字運動月間」**として、多くの方に赤十字の理念や活動にご理解とご協力をいただけるよう、全国でのテレビCMをはじめ、さまざまな形で情報を発信します。

昨年と同様、今年の**新CMにも、アンバサダーの上白石萌音さんが登場**。CMの中では、海外の避難民支援や、東日本大震災、能登半島地震の被災地での活動など、苦しんでいる人々のために365日動き続ける赤十字の姿が映像で流れ、上白石さんの力強い声が、次のように呼びかけます。

今もたすけを必要としている人がいる。
そこには、赤十字がいる。
苦しんでいる人を救うために。
赤十字は、動いてる。
一緒なら、救える。

また、**新CMの楽曲『夜が明けるまで』は、シンガーソングライターのUruさんが赤十字の活動に共感し書き下ろしたもの**。人に寄り添うような優しい歌詞と歌声に心が揺さぶられます。今回の楽曲提供に寄せてUruさんから特別にいただいたメッセージの全文は、左下の二次元コードを読み込むことでご覧いただけます。さらに、**アンバサダーとして1年間赤十字の活動を伝え続けてくれている上白石さんからのメッセージも同サイトでご紹介**しています。

また、赤十字運動月間の**特設サイトには、日赤の各種事業の紹介や能登半島地震での活動リポートなどを掲載**しています。こちらもぜひご覧いただき、赤十字活動へのご理解やご協力を、よろしくお願いいたします。

新CMと上白石さん、Uruさんメッセージはこちら →

「赤十字運動月間」特設サイトはこちらから →

■コマーシャル動画

■特設サイト

---

vol.2 未来を守る 防災ゼミナール

日赤の**災害救護研究所**の専門家の視点から、災害時に必要な知識や今から始められる防災など、役立つ情報を発信します。

災害救護研究所とは？
日本赤十字看護大学付属の研究機関として2021年に発足。災害時の救護活動を通して得た知見を学術的に分析・集約し、被災者の苦痛の予防・軽減を目的とした研究所。

今回のテーマ

被災地で耐えるのではなく、心身を守るための

「広域避難」という選択

今月の研究部門
災害看護部門

お話を伺った人
内木 美恵さん
日本赤十字看護大学教授
災害看護部門 部門長

私は看護師・助産師の経験をもとに、看護大で後進を育成する立場ですが、災害発生時には被災地で支援も行います。また同時に、災害看護部門の研究者の視点でも、被災地の状況を把握するように努めています。能登地震の被災地で感じたのは、避難所の在り方に、これまでの災害の経験があまり生かされていない、ということ。座布団で雑魚寝をしていたり、トイレが設置されても被災者が利用しやすいようになっていないなど、**被災者の心身の健康を守るのが難しい状況**でした。一方で、かつてない良い面もありました。避難所には新型コロナウイルスなどに感染した患者がいて、蔓延してもおかしくない環境でしたが、それを防げていたのです。これは約3年経験した**コロナ禍を経て、人々の衛生意識が変わった**からだと思います。日常的な手洗いや手指アルコール消毒、マスクの着用、咳のエチケットなどの個人の衛生行動が普及していて、今後も習慣として維持できると、災害時の健康を守ることにつながります。

さて今回、私はあらためて、皆さんにお伝えしたいことがあります。それは、**「災害の備えとして、被災地外の地域（他県や遠方）に避難できる準備をすること」**。特に、妊産婦や乳幼児、高齢者、医療的なケア児（者）など配慮が必要な方とその家族には、「広域避難」は最重要の備えと言ってもいいです。多くの方が、住み慣れた場所で耐える、頑張る、という意識で災害への備えをされているかと思います。しかし、集団生活、最低限の食事など、ストレスの多い避難所生活に耐えることは、心身の健康や命に関わる負担となります。また、子どもの健全な成長のためにもできれば避けたいと思います。2016年熊本地震の被災地で私が経験した事例では、大人が不安やストレスを抱えながら避難生活を送っていると、子どもの態度や言葉が荒れたり、神経過敏になったり、ということもありました。日々成長する中で環境から多くを吸収する子どもは、大人の苦悩まで吸収することがあります。住み慣れた地域に残りたいお気持ちはとても理解できます。しかし、**一番大切なのは健康と命。遠隔地に頼れる場所が少ないという人ほど、災害の前に準備をしておく**。一時避難でよいので、避難所生活の辛さを減らすための備えをすることを、ぜひ前向きに考えてみてください。

2 TOPICS

日赤の“公式マスコット・キャラクター”、デビュー10周年！
『ハートラちゃん』の魅力を紹介

プロフィール

誕生日は5月8日。ハートランドの森に住む森の精。苦しんでいる人を放っておけない性格で、穏やかだけど、時にすばらしい行動力を発揮します。特技は、世界中の人や動物、植物と話せること。トレードマークは、額にある赤い十字の模様。好きなことは、風船ブランコでの空のお散歩です

ハートちゃん
ハートラちゃんの心の友。すてきなハート形の翼を持ち、可愛い歌声が皆の心を癒やします

ハートラちゃんの大好物の「ハートのさくらんぼがなる木」に囲まれた、空に浮かぶ不思議な森

ハートラちゃんって？

日赤の活動を多くの人に知ってもらい、一緒に活動に参加してもらうために生まれたハートラちゃん。トラと似た姿の“森の精”ですが、「苦しんでいる人を救いたい」という熱く優しい心を持った赤十字ボランティアの一人です。日赤の事業を応援するため、献血を呼びかけるプラカードを持ったり、コロナ禍ではマスクをつけて感染予防や手洗いを推奨したり、さまざまなポーズやコスチュームで見る人に優しく訴えかけてくれています。ハートラちゃんは、赤十字の活動に参加する人を増やしたい一心で、全国のイベントに駆けつけ、癒やしと共に、赤十字の温かいハートを広めます。

ハートラちゃんの存在が、日赤への親しみや関心を高め、仲間を増やしていくことにつながり、その活動がさらに多くの人へと広がっていくことを願っています。

献血ハートフルストーリー vol.5

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

献血ボランティアは、気軽にできる“命を救う”活動

今月のひと

profile
岐阜県赤十字
血液センター
学生ボランティア
（岐阜薬科大学5年生）
田中（たなか） 雅敏（まさとし）さん

私は、献血推進のボランティア活動を行っています。活動のメインは**街頭での呼びかけや季節ごとの献血キャンペーンの盛り上げ**などで、その他にAYA WEEK（若年世代のがん患者の支援や啓発に関するイベント）や県を超えた学生献血ボランティア組織の会議にも参加しています。もともと学生のうちにボランティアをしたいと考える中で、薬科大学の学生として多くの人の命を救うことにつながる活動にしようと、この活動を選びました。私は病院の薬剤師を志していますが、献血された血液が、どのように血液製剤となって患者さんの元に届くのかを知りませんでした。この活動を通して、自分が将来携わるかもしれない分野にも触れることができ、認識が深まりました。また、**一緒に活動する同じ世代の仲間の存在に、一人ではないという心強さを感じます**。若い世代はボランティアにあまり前向きでない人も多いのですが、踏み込んでみると学校という限られたコミュニティとは違う新しい景色を発見することができ、**普段は出会わない人々にも出会えて、自分の殻を破るきっかけになると思います**。また、街頭でどのように声をかければ献血に協力してくれるだろうかと考えて行動する中で、足を止めて話を聞き、**献血に協力してくれる人がいると、小さなことですが、社会に貢献できたと実感**します。

献血推進のボランティアは、どこの地域でも参加でき、資格がなくても人を助けることができる活動です。若い世代の献血離れが課題となる中で、**若い世代にこそ、まずは気軽にボランティアとして関わって、献血の大切さを知ってもらいたい！** 命を救うつながりがもっと広がっていってほしいです。

Area News

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

01 HOKKAIDO 学生による救護活動も評価 伊達赤十字看護専門学校の80年の歴史に幕

3月16日、伊達赤十字看護専門学校で閉校記念式典が行われ、1700人以上の看護師を育成した80年の歴史に幕が下ろされました。その歴史において、平成12年3月の有珠山噴火の際に同校併設の施設で行った「こころのケア」活動は、学生たちが組織的に展開する赤十字初の試みであり、約3カ月にわたり学生奉仕団として救護活動の一翼を担ったことは、高く評価されました。式典では長年講師を務めた方々などに学校長から感謝状を贈呈。今後も、諸先輩方が築いた伝統が末長く受け継がれ、医療や災害現場で困難を乗り越える原動力となっていくことを願います。

02 CHIBA 楽しく学んで防災力向上へ 防災イベント「まなぼうさい」

防災イベント「まなぼうさい」に日赤千葉県支部が出展。3月3日の蘇我では、防災クイズや風呂敷リュックサックの作り方体験などを行い、120人がブースに来場。隣に出展した「バルーン工房J&B」の方がハートラちゃんに注目し、素敵なバルーンアートを作成していただきました。また、3月10日の幕張新都心では、日赤考案の「家具安全対策ゲーム（KAG）」を実施。ゲーム感覚で防災意識を高め、家具などの安全対策も紹介しました。参加した子どもからは「わかりやすくて楽しかった」という声や、保護者からは「帰宅後に改めて対策したい」などの感想が寄せられました。

MIYAGI 03 視覚に頼らず 命を救う行動を 視覚支援学校で救急法講習

3月18日、日赤宮城県支部は、宮城県立視覚支援学校の学生を対象に救急法短期講習を開催しました。目で見て状況を確認することが難しい受講者たち。まずは使用する人形やAEDデモ機を触って観察。指導員も、視覚に頼らない感覚で伝えるべく目を閉じ、大出血の判断方法の一つとして血液（鉄）の匂いがするか、など、視覚以外の感覚の判断を重視。指導員の動きにはナレーションもつけました。受講した芳賀香音さんは「今回が2回目。経験が浅く知らないままだと一歩を踏み込めないけれど、一歩を踏み出しやすくなった」と語りました。誰もが遭遇しうる緊急事態に備えて、日赤は各地で救急法の講習を実施しています。

04 SAGA 佐野常民（つねたみ）生誕200年記念 その生涯が短編動画に

右下の二次元コードから動画が視聴できます

日本赤十字社の創設者であり、初代社長の佐野常民の生涯を描いた動画「～佐野常民の『志』を未来へ～」（佐賀県文化課制作）が一般公開されました。この動画では、佐賀藩から派遣され訪れたパリ万国博覧会での赤十字との出会いから、日赤の前身・博愛社を創設したことが、約7分で描かれています。ナレーターは、祖父が佐賀県出身という人気講談師の六代目 神田伯山氏。アニメーションには、米国アカデミー賞短編アニメーション賞の受賞歴もある脚本家・平田研也氏を迎えた作品。昨年の九州八県赤十字大会の会場限定で先行上映され、今回の一般公開に至りました。

世界最古の国際人道基金「昭憲皇太后基金」

昭憲皇太后。時代を先取りした「平時の人道支援」という御心に、現在も深い敬意と感謝が寄せられる

今年度の支援詳細は日赤WEBサイトをご覧ください

毎年4月11日のご命日にあわせて発表されている「昭憲皇太后基金」。1912年、昭憲皇太后が国際赤十字の平時事業を奨励するために寄贈された10万円（現在の3億5000万円相当）を基に創設された世界最古の国際人道基金です。今年は、17カ国の赤十字・赤新月社に対して総額8145万円（スイスフランを円に換算）相当の配分が決定しました。同基金の配分額は累計27億円相当に換算され、配分先は172の国と地域にのぼります。

秋篠宮皇嗣妃殿下が義肢製作所訪問 製作に取り組む職人に真剣なまなざしを送る

上）小池義肢装具士の話に真剣に耳を傾ける妃殿下。現在同施設では、国家資格を有する3人の義肢装具士が在籍し、製作に取り組む

左）義肢製作所では、職場体験・施設見学の受け入れなど、義肢製作の普及のためのさまざまな活動を行う

3月18日、日赤名誉副総裁でもある秋篠宮皇嗣妃殿下が、千葉県赤十字会館を訪れ、「第59回献血運動推進全国大会」で血液研究の功績を称えられた受賞者や献血のボランティアらとご歓談された後、同館内にある義肢製作所を見学されました。日赤の義肢製作所は、昭和27年に開所し、県内の手や足を切断された方や麻痺により手や足などの機能不全を抱えている方に対して、義手や義足、また補装具を製作している施設です。

妃殿下は、初めに日赤千葉県支部の飯嶋喜史（よしふみ）事務局長から義肢製作所の活動についての説明を受けられ、その後作業室へ。施設で製作された義足を前に、小池誉士憲（よしのり）義肢装具士からの製作過程についての解説にも、熱心に耳を傾けられました。また、採型室、石こう室、機械室と、各作業室での作業の様子もご見学。妃殿下は、義足の装着方法や重さなどについて質問されるなど、約40分もの間、じっくりと見学されました。

義肢・補装具は利用者の体の一部となるもの。同製作所では、利用者の生活環境に適したものを製作することに努めています。そのため、定期的に利用者宅を訪問し、修理や生活環境に配慮した調整なども行います。妃殿下は、病気などで手や足を失われた方が義肢・補装具を装着することで自立し、安心して暮らせることを願いながら、日赤職員から説明をお受けになりました。

プレゼント（A）

5名様『近衛忠煇　人道に生きる』

日本赤十字社名誉社長・近衛忠煇 著

旧華族の家に生まれ、「中立」を胸に、身を賭して人助けの道を歩んだ「赤十字人」の軌跡。

「武力紛争、自然災害、感染症、飢餓、貧困――。私は世界のあらゆる危機の現場を踏んできましたが、改めて『人道主義ですべてが解決するのか』と問われると、イエスと断言できる自信はありません。人命や尊厳は守らなければならないと誰もが感じるべきものなのに、国家や国際社会の利害の前でいとも簡単に無視され、ないがしろにされる現実を見てきたからです」（「はじめに」より）

近衛忠煇（このえ・ただてる）
2005～2019年まで日本赤十字社長を務め、アジア人として初めて国際赤十字・赤新月社連盟会長も務める。個人に贈られる国際赤十字・赤新月活動における最高位の褒賞・アンリー・デュナン記章も受賞

定価：2090円（税込）
発行・発売：中央公論新社

詳しくはこちら

プレゼント（B）

5名様『野球しようぜ！　大谷翔平ものがたり』

大谷翔平選手 特別協力絵本

今や世界的なアスリートとなったMLBロサンゼルス・ドジャース所属の大谷翔平選手の半生をつづった絵本。世界中の子どもたちに夢を持つ大切さを教え、「君なら なんだってできる!!」と背中を押してくれる一冊です。日本全国の小学校への野球グラブ寄贈や、企業とタッグを組んで小・中高生に海外留学をプレゼントする取り組みなど、社会貢献活動にも力を注ぐ大谷選手。**この本の売り上げの一部も、日赤の活動資金に寄付されます。**

定価：1760円（税込）
発行・発売：株式会社世界文化社

Major League Baseball trademarks and copyrights are used with permission of Major League Baseball. Visit MLB.com.

詳しくはこちら

PRESENT!! “日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう！

Quiz

Q. 赤十字精神を表現しているもので正しいのは次のどれ？

ア．敵味方の区別なく、救う
イ．敵味方の区別なく、許す
ウ．敵味方の区別なく、戦う

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント（C）

ダイソン 空気清浄機能付タワーファン（Dyson Pure Cool Link™）

夏にはパワフルな扇風機として、また1年を通し空気清浄機としても活躍するタワーファン。花粉やウイルス、PM 0.1レベルの微細な粒子の他、有害なガスの大幅な除去にも作用します。活性炭フィルターで、揮発性化合物やニオイも取り除き、お部屋の空気が快適に。手入れも簡単で、夜の静音運転機能も便利なタワーファンです。

3名様に当たる！

本体サイズ：高さ1022mm×幅196mm×奥行き196mm
本体重量：3.72kg

プレゼント応募方法

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前　②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢　⑤赤十字NEWS5月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥ご希望のプレゼント（A）・（B）・（C）　⑦（C）をご希望の方：クイズの回答　⑧5月号読者アンケートの回答
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

〈⑧ 5月号読者アンケート〉質問項目

【A】日赤の「会員」ですか
ア．会員（年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く）　イ．会員ではない

【B】赤十字について知っている活動はどれですか※下記選択からア～ケの文字をご記載ください。複数選択可
ア．国内災害救護　イ．国際活動　ウ．赤十字病院　エ．看護師等の教育　オ．献血（血液事業）　カ．救急法等の講習　キ．青少年赤十字　ク．赤十字ボランティア　ケ．社会福祉

【C】今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア．とても理解が深まった　イ．ある程度理解が深まった　ウ．すこし理解が深まった
エ．以前と変わらない

【D】興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア．特集　イ．TOPICS　ウ．防災ゼミナール
エ．献血ハートフルストーリー　オ．エリアニュース
カ．プレゼント　キ．ワールドニュース

【E】赤十字NEWSの適切な大きさは
ア．今のまま　イ．A4サイズ　ウ．小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【F】赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア．月に1回　イ．2カ月に1回　ウ．3カ月に1回　エ．半年に1回

【G】赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン（オンライン）で読みたいですか、いままでどおり紙で読みたいですか
ア．オンライン　イ．どちらかというとオンライン
ウ．（オンラインと紙の）両方　エ．紙　オ．どちらかというと紙

【H】その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望（任意）

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室　赤十字NEWS
5月号プレゼント係

WEB応募／下の二次元コードからご応募ください。

5月31日（金）必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

―ワールドニュース―

アフガニスタン地震　複合危機の中で活躍する女性たち

2023年10月7日、アフガニスタン西部で発生したマグニチュード6.3の地震を受け、日赤は、国際赤十字と共にアフガニスタン赤新月社の被災者支援活動に携わっています。国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の要請で現地に派遣された日赤医療センター看護師の苫米地（とまべち） 則子（のりこ）さんに、被災地の状況を聞きました。

地震の甚大な被害により過酷さを増す人道危機

今回の被災地・アフガニスタン西部ヘラート州は、レンガや石造りなど脆弱な構造の家屋が多く、全壊した村も多数あり、180万人が被災し、約1500人が亡くなられました（2023年11月時点）。また、地震後にマイナス20度にもなる冬を迎えたことで、支援が滞ってしまう状況に陥りました。それまでもアフガニスタンでは、深刻な干ばつや洪水、数十年来の紛争の影響、さらに経済危機といった**「複合危機」により、女性や子どもなど支援が必要な人々を取り巻く環境がとても厳しい状況でした。**それに加えて、11月には周辺国に逃れていたアフガニスタン避難民が強制的に帰還させられる事態にもなり、大量の避難民の移動が発生しました。現地は混乱を極め、私が現地に派遣された当初も、安全面から自由な移動が制限される状況が続いていました。

私は今回、IFRCの緊急対応要員として、アフガニスタン赤新月社（アフガニスタン赤）の保健医療活動を支援しました。アフガニスタン赤では、IFRCに加えてノルウェーやデンマークの赤十字社の支援で、国内の各地に巡回診療チーム（Mobile Health Team：MHT）を派遣していて、その巡回にも同行しました。MHTでは、基礎的な医療の提供を中心に、ポリオワクチンの普及や教育、栄養状態のスクリーニングに加え、サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置）の研修を受けた「こころのケア」担当者が常駐し、心と身体の健康を保つための支援にも注力しています。また、巡回診療の他に、被災した村では希望者に応急手当のレクチャーも行われています。参加者は、**自分たちの住む土地の復興に向けて何かできないかという思いと共に、赤十字のボランティアとして活動できることに、誇りを持っている**ように感じられました。

さまざまな権利が制限される中で志を持って活躍する女性たち

アフガニスタンは、2021年の政権交代以降、特に女性の権利が制限されています。女性一人での行動が簡単にできないだけでなく、学校で高等教育以上を受けることができず、一部の職業を除いた就業も禁止されています。その中で活躍するのが、“グランドマザー委員会”と呼ばれるグループです。その名の通り**日本でいう“おばあちゃん”が地域の要となり、地域における女性に関連する問題の吸い上げや、男性とのコミュニケーション（交渉）をグループを通して可能とする役割を担っています。**また、救急法や衛生講習の指導員を女性がする場合も、その女性の家族から、父親や兄弟などの男性が一人付き添わねばならないなどの配慮が必要になります。女性が自由に、学びの機会を得ることや活躍することが難しい社会、女性の声が外へ届きにくい社会構造の中で、本当に必要とされる支援を把握し、価値のある支援に結びつけていくことも赤十字の大切な役目です。

一方で、女性の就業は、保健医療分野の一部では認められていて、その限られた場所で能力を発揮し、活躍する女性の姿があります。その一人であるアディバさんは、地域保健・水衛生支援担当課長代理として、IFRCの事業管理を担当しています。以前はNGOや保健省に勤務していましたが、政変により失職。しかし赤十字が彼女を採用し、短期間で課長代理のポジションにまで昇格しました。今は3人の子どもの母親として、また一家の大黒柱として、親戚も含む大家族の生活を支えています。精力的に仕事をし、家族を養いながらオンラインで修士号取得にも励んでいて、苦心してネット環境を整える費用を捻出するなど、ひたむきに行動するその姿勢には心を打たれます。そして、アディバさんのように、多くの女性が就業や教育の機会を求めているという話も聞かれ、現地で活動をしていると、さまざまなことを考えさせられました。

このように、さまざまな困難に直面するアフガニスタンの人々を支えるために、日本のみなさんから赤十字を通じて送られた寄付が活用されています。**赤十字は、政治的にも完全に中立の立場で、諦めることなく支援を継続していかなければなりません。**多くの方に、アフガニスタンの今に関心を持っていただき、赤十字と共に、彼らを支援する気持ちを持ち続けていただきたいです。

アフガニスタン赤は医療を受けづらい地域の住民が応急手当を行えるように救急法を普及している

巡回診療チームの診察の様子を視察する苫米地看護師（写真中央）

女性リーダーになり、国民のみならず世界の人々の健康に寄与していきたいと語るアディバさん（左）

苫米地 則子
（とまべち・のりこ）
日本赤十字社医療センター
国際医療救援部 副部長

スーダン紛争での国際救援活動に携わって以来、計16回の国際派遣を経験。2020年、「ダイヤモンド・プリンセス号」船内の新型コロナ対応では、看護師としての専門知識と数多の国際経験を遺憾なく発揮した。2021年、世界的な栄誉である第48回 フローレンス・ナイチンゲール記章を受章。